

上田友梨 (2003 年度入学)

有東木^{うとうぎ}の盆踊りの音楽的分析

本研究の目的は、静岡市有東木の盆踊りの音楽を採譜して資料を作成し、その資料を用いて音楽的な分析を行うことである。静岡市有東木は静岡駅から安倍川沿いに 33 キロ程北上した標高 500m~650m の斜面に展開する 70 戸、235 人の山村集落である。盆踊りは 8 月 14 日・15 日に行われる。男踊り・女踊りに分かれているという特色があり、全 25 曲が伝承されているが、音楽的な面を扱った先行研究がないことから研究対象とした。伴奏は男踊り・女踊りともに締太鼓ひとつで、歌は中世から近世初期に流行した小歌と歴史的に深い関係がある。灯籠を頭上に乗せて輪の中央で踊る、室町時代の風流の流れを汲む中踊りが出る。

研究方法は小泉文夫の方法に学び、音楽的現象を音楽たらしめているのは音そのものではなく、われわれの意識としての体験であるという立場から、当事者がいかに盆踊りを体験するかを考察し、採譜をした。盆踊り歌は既存の歌に太鼓の拍子をつけて作られるため、歌と太鼓の拍子や拍節が違うことが多い。しかし、太鼓の拍子や拍節は踊りのリズムと等しく、当事者が体験するリズムであるので、太鼓のリズムを基準として採譜をした。拍には伸縮があるが、踊り手が一拍と感じている拍を一拍ととった。

本論文は 3 章から成る。第 1 章では有東木の盆踊りについて概観し、盆行事・盆踊りの伝播・伝承について先行研究を整理した。

第 2 章「盆踊り歌の構成」では、詞章と音楽の両側面から考察を行った。入り端と引き端・曲の始めと終わりの文句・曲に入る前に歌う歌など、風流踊り歌の構成を持つことと全体の構成が序破急であることを述べた。盆踊りの分析・分類の基準には「型」という概念を用いた。型は任意の振り・旋律・歌詞の文句のセットであり、盆踊り歌は型に適宜詞章を当てはめて作られていた。風流踊り歌の研究においては、これまで詞章の研究が盛んに行われてきたが、踊りを体験する人々はまず踊りの振り・リズム・旋律によって踊りを覚えたり分類したりしている。そこで全曲を分析し、型に分類した。すると男踊り・女踊りともに、盆踊り全体の枠組みを成し、儀礼的な要素が強い型が明らかになった。

第 3 章「各曲の構造の分析」では、男踊りと女踊りそれぞれの形態に則した歌・太鼓・踊りの各要素の主従関係と、太鼓の語法について論じた。女踊りでは歌い手が輪の中に立ち、太鼓はたすきで固定し踊りの輪に加わって打つ。踊り手と歌い手が分かれている為、

太鼓は踊りと一致した周期で全体を統制し、歌と踊りを融合させる。男踊りは踊り手が歌いながら踊り、太鼓は輪の外で打つ。歌は歌曲としての性格が強く、太鼓は所作に応じたリズムを打つ語法がみられる。男踊りは歌、女踊りは繰り返しの踊りにそれぞれ重きが置かれており、そのことが、男踊りは一つの旋律パターンが長く、いくつかの振りを組み合わせる風流踊り系統、女踊りは一つの旋律パターンが短く、一連の振りを繰り返す盆踊り系統という構造の違いに影響している。

また、男踊りの曲の間奏部分に奏される速い太鼓の拍子は、中踊りを踊らせるための拍子であったことがわかった。太鼓の語法については、踊り手が採り物のササラやコキリコを奏するときや、特徴的な所作をするときのリズムに対応し、踊りを支え導いていることを確認した。

今後の課題としては各地の風流踊りとの比較研究が挙げられる。有東木の盆踊りは観光化せず、芸態が長い間変容していないと考えられるため、本研究は日本音楽史や民俗音楽研究の基礎資料として役立てられると思われる。